

「広島神楽」の伝承過程と興隆に関する社会学的研究

高 崎 義 幸

(受付 2012年5月31日)

目 次

- I. 序 論
- II. 「広島神楽」の変遷
- III. 経済（観光）資源としての神楽
- IV. 神楽大会客席アンケートにみる広島神楽の現況
- V. 結 論

I. 序 論

本稿は、広島県の芸北地方¹および島根県の石見地方²一帯の西中国山地に伝わる神楽（いわゆる広島神楽）の伝承過程と興隆に関する社会学的な調査研究である。日本全国には、現在ゆうに千を越す神楽があると言われ、その多くは氏子、保存会などの努力によって細々と伝承されている。しかし、全国化、グローバル化する文化の感性に適合できず廃れていくものや、過疎化による継承者の不在などで消滅していくものも少なくない。このような状況の下、今日「広島神楽³」は、広島県および近県でブームといわれるほど隆盛をきわめており、地域振興の資源の一つとして期待されている。

神々のふるさと出雲神話で有名な中国地方は、多種多様な神楽が存在し、800団体を超える神楽の組織がひしめく神楽どころとして知られている。多くの神楽団や民俗芸能がその伝承に苦勞する中で、広島県と島根県における神楽の中には、今日、ブームとさえいわれる状況を作り出している神楽がある。それは島根県の石見地方に伝わる神楽に端を發し、今日、「広島神楽」あるいは「芸北神楽」などと呼ばれる神楽（以下「広島神楽」で統一）である。

今日ブームとなっている「広島神楽」は、氏神社に奉納される祭礼としての神楽ではなく、

-
- 1 芸北地方は広島県山県郡および安芸高田市一帯を指す。芸北地方は、芸北神楽と呼ばれる郷土芸能が盛んで、県内約200の神楽団のうち、約150団体が芸北地方に存在する。
 - 2 広島県北のと島根県の境に位置する石見地方に伝わる神楽は、石見神楽と言われ、芸北神楽のルーツとして知られている。
 - 3 芸北地方および石見地方に伝わる郷土芸能が「広島神楽」と呼ばれるようになったのは、2000年代に入ってからのものであり、それは93年の中川戸神楽団による「スーパーカグラ」以降、都市部を中心にブームとなり、観光振興に利用されはじめたときからである。

能舞といわれる演劇性の高い神楽である。それらは地域の体育館や都心部の劇場ホールなどで開催される神楽大会で目にすることができる。広島県で神楽の大会が始まったのは、戦後まもない1947年のことである（それ以前の昭和初年から戦後にかけては、盆踊り競技大会が県下各地で盛んに行われていた）。現在では、広島県とその近県を含め、実にさまざまな規模の神楽大会（競演・共演）が有料で開催されており、その回数は年に40回以上にのぼる。チケット代金はおよそ1,000円から高いものでは6,500円まで様々である。

神楽大会の他には氏神社への奉納神楽をはじめ、地域のイベントや祭り、ホテルのディナーショーなどで上演されている。近年では他県や海外からも上演要請があり、県外の人々の目に触れる機会も多くなっている。また最近では、「広島神楽」と地元広島のオーケストラとの共演⁴が行われるなど、芸術性も高まってきており、都心部に広島神楽の常設館を望む声も挙がっている。

このように、「広島神楽」は「郷土芸能」の枠を超え「大衆芸能化」、「観光資源化」の様相を呈しており、今後の動向が注目されている。

そこで本研究では、「広島神楽」が隆盛を極めることになったその背景と、ブームを支えている神楽団と観客の現状を把握し、その問題・課題を明らかにすることを目的とする。

II. 「広島神楽」の変遷

1. 「広島神楽」の変遷

広島県は「神楽どころ」といわれており、県内各地に200を超える神楽団が存在する。秋の氏神様への奉納だけでなく、様々な神楽大会やイベント、アトラクションに於いて神楽が上演されている状況というのは全国でも珍しい。

広島県の神楽は芸北神楽、安芸十二神祇、比婆荒神神楽、備後神楽の4つの形態に大別することができる。県内の神楽団のうち、その約半数が芸北地方に存在し、なおかつブームといわれるほど盛況期にあることから、全国的には広島県の神楽といえば芸北神楽のことだと思われる場合が多い。最近では広島県の新しい観光キャンペーンの目玉としてもはやされ、総称して「広島神楽」とも呼ばれはじめている。

芸北地方に伝わる神楽は、隣接する島根県石見地方の石見神楽がルーツと言われている。石見神楽の原型は平安末期からの田楽と神事神楽との融合によって生れ、その後出雲の佐陀神能の影響をうけて、室町時代に今日の石見神楽はできあがってきた、といわれている。

4 山王神楽団（北広島町）と広島交響楽団とのコラボレーション「オロチ〜火と水への讃歌〜神楽とオーケストラのために」が2009年8月31日、広島市内の ALSOK ホールで開催された。作曲：伴谷晃二氏（エリザベト音楽大学教授）

幕末の石見・芸北地方の神楽は、すでに氏子（里人）によって盛んに舞われていた。しかし明治政府が敬神の思想を唯一の政策としたことによって、神主の身分に一層の自負と自重が課され、芸人的で見世物風の神楽を演ずることは禁止され、祭礼に力を注がされるようになった。

明治10（1877）年を過ぎると、民間神楽舞は次第に石見各地に波及していった。明治15（1882）年、浜田の国学者で石見国神道事務分局長であった藤井宗雄は、石見神楽により芸術的な気品を与え、出雲神楽に劣らない郷土芸術を育成しようという熱望から石見神楽の改正を試みている。その後も第2次台本改正、第3次台本改正が行われ、ますます庶民による神楽が隆盛を極めていた。

近年に至って、石見神楽が多くの人びとに知られるところになった最大の転機は、1970年に開催された「大阪万博お祭り広場」での神楽上演である。それまで郷土芸能としての神楽は、地域内のごく少数の人々の前で披露されるに過ぎなかったが、この「お祭り広場」での大きなステージでは、これまでのように二間四方で舞っていた神楽舞を広大なステージ空間に合わせて再構成して舞わざるをえなくなり舞の所作自体も変化した。文化、宗教、生活習慣が全く異なる不特定多数の見物人の好みに迎合したものへ変化したのである。演劇的な効果音や視覚的要素が存分に取り込まれた神楽は、演出家によって設定された時間内にそのエッセンスだけを短絡的に表現するものになり、従来の神楽とは全く趣の違うものとなった。

このような系譜をもつ石見神楽が、やがて中国山地を越えて広島県北西部に伝わり、第二次大戦直後、能や歌舞伎などの演目をもとに芸能性の強い神楽に脚色されていったものが、「芸北神楽」となり、そしていまの「広島神楽」となった。

戦後まもなく、広島県の、とくに娯楽に乏しかった農山村部では神楽に人気が集まり、新作神楽といわれる芸能性の高い神楽が作られるようになった。新作神楽は見栄えもよく内容も分かりやすいものであったことから多くの神楽団が競ってこれを演ずるようになった。そして各地で神楽競演大会が開催されるようになった。

1947年には山県郡旧加計町で、初の神楽競演大会である「芸北選抜神楽競演大会（現西中国選抜神楽競演大会）」が開催された。その2年後の1949年には、山県郡旧千代田町で「芸石神楽競演大会」が開催され、神楽の技と芸は競われるものに変化していった。それは大いに団員の士気を高め、神楽団そのものの存続と発展に大きく貢献するとともに、今日の神楽ブームのきっかけとなった。

1950～60年にかけての高度経済成長期には、農村から都市への人口流出が加速化した。農村内部でも都市化が進み、比較的若い世代で支えてきた神楽を取り巻く環境も変化した。そして神楽の舞台は、狭くて暗い神社の境内や神楽殿から空間の広い集会所や、小学校の体育館などへと移っていった。

高度経済成長期の前半は人口流出と農村文化の衰退が進み、神楽団も団員の減少により休団する神楽団も現れた。秋祭りのときだけ帰省する人たちで構成する神楽団や残った団員で細々と活動しながら、団を存続させる努力を重ねていった。

高度経済成長期にかけて神楽やその他の伝統行事、郷土芸能は存亡の危機を迎えていた。このような状況下、1971年からは広島市中区の広島県立体育館（現在は広島市西区の広島サンプラザ）で「広島県神楽競演大会」が始まり、広島市在住の多くの芸北地方（山県・高田郡）出身者が一堂に会して神楽を観る機会を作った。

この大会は今年（2012）で42回目を数えることになったが、当初は広島市に働きに出てきていた山県郡出身者が市内でも神楽を見たいということで、広島山県郡友会が中心となって始めたもので、現在でも大会運営は広島山県郡友会が行っている。

1990年代に入ると、広島市内の劇場ホールで神楽が登場した。いわゆる「スーパーカグラ」

表 3-1 「広島神楽」の変遷

年代および世相・できごと	神 楽
1800年代後半～1900年代前半 ・ 国家神道政策	<ul style="list-style-type: none"> ■ 神職神楽から民間神楽へ ・ 石見神楽の第一次台本改正（1810） ・ 第二次台本改正（1882） ・ 第三次台本改正（1937）
1940年代後半（戦後） ・ GHQ による戦後処理 ・ 民主化の進展 ・ 余暇需要の高まり	<ul style="list-style-type: none"> ■ 神楽存続の危機 ・ 神道色の強い神楽の危機⇒検閲通過のため「神楽」を「農村舞楽」に。 ■ 新作神楽（新舞）の登場 ・ 美土里町（安芸高田市）で新しい舞が登場。 ■ 神楽大会の登場 ・ 芸北選抜神楽競演大会（1947） ・ 芸石神楽競演大会（1949）
1950～60年代 ・ 高度経済成長期 ・ 産業化、工業化、都市化 ・ 農山村部から都市へ人口移動	<ul style="list-style-type: none"> ■ 舞台の変化 ・ 神社の境内から地域の集会所、体育館へ。 ■ 神楽団存続の危機と担い手の変化 ・ 長男以外の者や女性を受け入れながら団の存続。
1970年代 ・ 高度経済成長の終焉 ・ 祭り、郷土芸能の復興	<ul style="list-style-type: none"> ■ 演出の劇的変化（大阪万博への出場） ・ ショーアップと簡略化。 ■ 広島市内で初の神楽大会開催 ・ 広島県神楽競演大会（1971）
1990年代以降 ・ バブル経済崩壊 ・ 「お祭り法」の制定	<ul style="list-style-type: none"> ■ スーパーカグラおよびホール神楽の登場 ・ 中川戸、原田神楽団による市内ホールでの公演（1993） ・ 神事の象徴「天蓋」が外され、ライトアップ。 ■ 神楽専用施設の登場 ・ 神楽門前湯治村開業と神楽ドーム（美土里町、1998） ・ ひろしま神楽グランプリ（神楽ドーム、1999） ■ 神楽の海外公演 ・ ロシア・サントクトベトルブルグ建都300年記念事業公演（2002） ■ 神楽ブームと神楽の観光資源化

の登場である。象徴的で伝説的でさえある1993年の「SUPER KAGURA 神々の詩」（中川戸神楽団による自主公演）がアステールプラザ（広島市中区，1,204人収容）で上演された。このことは各神楽団，特に若い団員に大きな影響を与えた。

スーパーカグラが始まって間もない頃は，まだ意識的に舞台には天井から吊り下げられた天蓋がつけられていた。天蓋とは仏様の天上空間を表し，本来，神楽はその内側でしか舞ってはいけないものである。しかし，数千人収容の大ホールでは照明の邪魔になり，また，二階席の観客が満足するような演出ができなかったため途中から外され，照明，音響をはじめ演出全体が舞台芸術となって，舞手の所作も大きく変わった。

これは新舞が作られたときと同じように，舞手が自由に自己表現できることの喜びだけでなく，観客も満足でき，舞手と観客との更なる興奮へと変わっていく象徴的なできごとであった。かつて石見神楽によって大阪万博で神楽そのものが不特定多数に観せるショーとして大きく変質してから20年を過ぎていた。

2. 芸北神楽の担い手

石塚（1980）によると，神楽はもともと神職のみが行っていたが，明治になると一般人も神楽を舞ってもよいことになり，一般人の舞子集団が組織された，とある。芸北神楽ではこの舞子集団のことを「神楽団」と呼んでいる。神楽団の多くは普通，氏神社を単位として活動している。米田雄介ら研究グループによる調査（2000年）によると，神楽団の構成人数は最少10人，最大30人，平均19.2人であった。また NPO 広島神楽芸術研究所による神楽団アンケート調査⁵（高崎義幸，2006年；以下，NPO 調査）では，神楽団の構成人数は最小9人，最大60人，平均21.3人であった。

一つの演目を演じるのに，舞（2人～7人），楽（大太鼓，小太鼓，手打鉦，笛の4人編成），舞台裏での各種操作（幕引き等）を考慮すると，神楽をする上で最低限必要な人数は12人程度といわれている。特に，新舞の演目では，登場人物も多く，演出もこだわるため人数が少ない神楽団はそのやりくりが大変だという。

神楽団の数は，米田らによる調査（2000年）では，芸北地域と安芸地域で百数十の神楽団があることが確認されている。

神楽団員のほとんどは地元の男性によって組織され，中学生までは子供神楽団に所属している場合が多いが，子供神楽団のない地域の子供や高校生は一般の神楽団に入る場合もある。また，神楽団はアマチュア組織であるため練習は通常夜間に行なわれ，シーズンや大会などが近づくと週に3回以上～5回の練習が続く。かつて神楽団のハレ舞台は秋の神社での奉納

5 広島県内の149神楽団を対象にアンケート調査を行い，60団体から回答を得た。

だけであったが、近年は大会やイベント、アトラクションに呼ばれる回数が増えてきているため、人気の神楽団になると週末はほとんど神楽公演に費やされるという。

神楽団の構成員について、先記の米田ら（2000年）の調査報告によると、団員の平均人数は19人、うち男性が18人とほとんどが男性で構成されている。女性の団員は1人となっている。NPO 調査（2006年）では、団員の平均人数は21人、うち男性が18.6人、女性が2.6人であった。

米田調査（2000）での神楽団における年齢構成では、20歳～39歳、40歳～59歳が多い。とくに北広島町の神楽団は20歳～39歳の割合が多く、安芸高田市的美土里町や高宮町は年齢構成にばらつきがある。また地域によっては20歳未満の団員がゼロのところもあるが、町の人口が少ないところは団員の年齢構造が高いということでもない。NPO 調査（2006）では、1神楽団あたりの平均人数は10代以下0.2人（1%）、10歳代3.4人（16%）、20歳代4人（19%）、30歳代4人（18.8%）、40歳代3.4人（16.2%）、50歳代3.7人（17.5%）、60歳代以上（2.5人）11.5%、合計21人であった。

神楽団員募集状況を見ると、61団体中59団体（96.7%）が現在、団員を募集中、2団体（3.3%）が募集していないと答えた。団員募集中の神楽団のうち「他地区からの入団も受け入れる」と回答したのは54団体（96.4%）、「氏子に限る」としたのは2団体（3.6%）、無記入3団体であった。このように最近では、自分の生れた地区の神楽団に入らず、自分のやりたい神楽を目指し、他地区の神楽団に入団する人、またそれを受け入れる神楽団も多くなっている。それほど神楽団ごとに個性が見えてきたのも近年の特徴である。

NPO 調査（2006）によると、広島県における1神楽団あたりの年間公演数は最小1回、最大35回、平均12.7回であった。

神楽団の年間運営費は、米田調査（2000年）によると、一番少ない神楽団で10万円未満、100万円以上のところも少なくない。広島県内における「広島神楽」系の神楽団を対象とする筆者の聞き取り調査（2005）では、年間予算が300万円以下が20団体、300万円以上が20団体、400万円以上が10団体、500万円以上が7団体であった。

主な支出項目は、交通費、幕や衣装、小道具などの修繕費、公演先での食事代などであり、主な収入は氏子神社での奉納時における御花代、頼まれ奉納、氏子からの寄附、その他各種大会やイベントの出演料となっている。頼まれ奉納の場合、出演料は20～30万円のところが多い。神楽大会の出演料金は一団体につき7万円～10万円が相場である。収入の約7割が交通費や食事代として消える。新たな演目に取り組み、そのための衣装を新調しようとする、500万円くらいかかる。また幕などを新調するときも出費がある。そのようなときは、氏子に寄附を募ったり、幕に広告を入れてもらったり、プール金を使ったりするのが一般的である。

現在、神楽団にプロ集団はなく、団員個人の収入ということもない。大会やイベントなどに出演する機会が増えたといっても、その分、管理費への出費はかさんでいる。

県内外で活動の場を広げる神楽団もいるが、経済的な面からは地域とまだ縁がきれることはない。地域は神楽団にとって主たる収入源となっているからでもある。

米田（2000年）の報告で神楽団の資金源は、出演料が42.8%、御花が42%、寄附が10.9%、個人負担が0.7%であった。筆者の聞き取り調査（2005年）では、神楽大会等によく出場し、一般的に人気があると言われている神楽団とそうではないところでは資金源の格差が広がっている。全般的には財源が厳しい状況の団が多いのが実態である。また、神楽面にはじまる各種衣裳等の生産もブームの中で急激に増加しているが、生産するのは個人的経営が主で、その経営は資金面で厳しいのが実態である。

Ⅲ. 経済（観光）資源としての神楽

現在、「広島神楽」は経済（観光）資源としての側面が行政や経済界から注目されているが、いまの「神楽ブーム」を作り、また支えているのは、県内および近県で行われている神楽大会である。広島県では、戦後まもない1947年に広島県山県郡加計町（現安芸太田町）で初の神楽競演大会「西中国選抜神楽競演大会」が開催された。その2年後の1949年には千代田町（現北広島町）で「芸石神楽競演大会」、3年後の1950年には大朝町（現北広島町）で「大朝町神楽競演大会」が開催されるなど、立て続けに神楽大会が始まっている。前述したように1971年、山県郡から広島市内へ働きに出てきた人たちによって組織された広島山県郡友会主催による初の広島市内での神楽大会「広島県神楽競演大会」が広島市内の体育館で開催されて以来、毎年のように新たな神楽大会（競演・共演）が開催されるようになった。2005年の時点では、競演・共演大会を合わせ年間37回の神楽大会が開催されている（図4-1）。

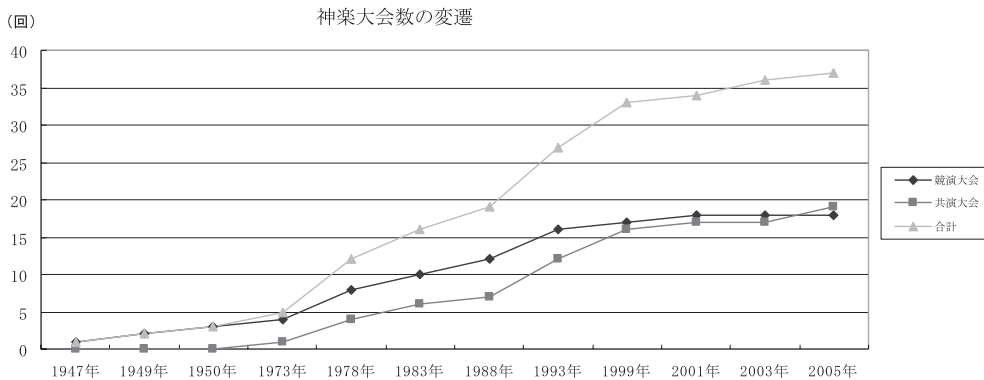


図4-1 神楽大会数の変遷（比較的規模が大きく継続性のあるものを抽出）

開催される神楽大会の特徴として、1990年代前半までは競演大会が盛んであったが、最近では共演大会の方が多くなっている。その理由として考えられることは、競演大会であろうと共演大会であろうと観客の関心はどこの神楽団が出演するかということや、受賞をかけた競演でなくても神楽団が手を抜かないということがある。あるいは元来神事である神楽に優劣をつけることは好ましくないという理由から共演大会なら出場するが競演大会には出場しないという神楽団もある。また創作演目などは、その所作や演出、上演時間などにおいて制限のある競演大会には不向きであることなどの理由がある。その他、共演の方が出演する神楽団と演目の自由度が高いため、観客にとって新たなお気に入りの神楽団や演目の発掘につながりやすいことなどもある。

最近では、共演・競演大会に加え、舞手と観客が一緒になって楽しむという趣旨の「遊演」という新しいジャンルの大会（2005年）も登場するなど、公演内容が多岐にわたっている。

広島県内で盛況をみせる神楽大会だが、主催者側の収支は採算ギリギリだと言われている。たとえば、毎年2月に広島市中心部で行なわれる「RCC 早春神楽共演大会」は、「ホール神楽」と呼ばれる劇場型神楽の最高峰で、神楽団にとって、この舞台で舞うことは、大きな憧れでもある。当日のS席チケットは6,500円で、毎回2,000人を超す観客で埋まる。しかし、広告費、会場費、演出スタッフや神楽団に支払う費用などを差し引くと、利益はほとんどないと主催者は証言する（RCC文化センター部長、H氏 55歳）。それでも毎年開催するのは特に広島市内や沿岸部在住の神楽ファンからの要望が強いからだという。

逆に、都市部に比べて芸北地方で行なわれる神楽大会は地域の経済効果があるといわれている。なかでも安芸高田市美土里町では、第三セクター「神楽門前湯治村」をつくるなどして、地元の文化資源である神楽を地域振興のための観光資源として開発することに力を入れている。

神楽門前湯治村設立構想は1988年の「ふるさと創生事業」に端を発し、町民アンケートやまちづくりシンポジウムなどを経て1998年7月にオープンした。しかし開業にいたるまでには様々な議論があったという。社長の溝本郁夫氏によると、構想当初は「神楽団の専用施設を作るのではないのか、そんなところにたくさんの費用を投ずるのはどうか」と地域の住民から批判された時期もあった、という。また町内13の神楽団で構成されている美土里神楽団連合会からも「我々は、こんなもの作ってくれと言った覚えはない」と言われた時期もあった、という。しかし、協議を重ねるうち、神楽をひとつの起爆剤にして美土里町のまち興しをやろうという話に収まって現在がある、という。

神楽門前湯治村は温泉、旅館、飲食、物販、食品加工、神楽ドーム、神楽面づくり体験工房等さまざまな機能を備えた複合的な施設として運営されている。年間約17～18万人が訪れ、売上は4～5億円の間で推移しているという。その運営の大きな柱の一つが神楽の上演で、

4月から11月までの日曜日に行う40回前後の定期公演（大人500円、子供300円）、と土曜日の夜に行われる年間40回前後の公開練習（無料）、それに年間5～6回の神楽大会があり、神楽だけで約4万人の来場者がある。メインは神楽競演大会の最高位といわれる『ひろしま神楽グランプリ』である。ここでの優勝が文字通り広島神楽の最高位の神楽団と言われる。他にも地元出身者の雇用、温泉、入湯税、地元農産物の販売など地元経済への波及効果もある。

IV. 神楽大会客席アンケートにみる広島神楽の現況

神楽大会客席アンケート調査結果概要

全国的にみても広島のような神楽に競演という形で互いの技を競い合うという大会・公演があるというのは大変めずらしく、それだけ広島の神楽は神事から離れ演劇性が強いものになっているとも言える。2004年に行なわれた神楽大会の客席アンケート調査結果の概要をまとめた。

1. 調査概要

本調査は大会主催者である「神楽スペシャル実行委員会」の協力を得て、2004年12月23日（木・祝日）に国際会議場フェニックスホール（広島市中区平和公園内）で行われた神楽大会「神楽スペシャル～大江山への道～」の観客を対象に、筆者が所属する「NPO 広島神楽芸術研究所」の名において行った。

調査票は1,000枚を手渡しで配布し、383枚の回答を得た（回収率：38.3%）。

2. 基本的属性

性別では、女性215人（56.1%）、男性168人（43.9%）で、ほぼ同じ割合であった。年代別では50歳代が29%、60歳代が34.5%と中年層が目立つ結果となった。40歳代以下の占める割合は合計でも14.6%であった。

性別・年代別では女性50歳代の68人（17.8%）、女性60歳代の66人（17.2%）・男性60歳代の66人（17.2%）、男性50歳代の43人（11.2%）、女性40歳代の24人（6.3%）、女性70歳代以上の19人（5.0%）・男性70歳代以上の19人（5.0%）、男性40歳代の15人（3.9%）、女性20歳代の17人（4.4%）、女性30歳代の13人（3.4%）、男性30歳代の8人（2.1%）、女性20歳代未満の6人（1.6%）・男性20歳代の6人（1.6%）・男性20歳代未満の6人（1.6%）の順に多かった。

表 5-1 年齢×性別 人 (%)

	女 性	男 性	合 計
20歳未満	6 (1.6)	6 (1.6)	12 (3.1)
20歳代	17 (4.4)	6 (1.6)	23 (6.0)
30歳代	13 (3.4)	8 (2.1)	21 (5.5)
40歳代	24 (6.3)	15 (3.9)	39 (10.2)
50歳代	68 (17.8)	43 (11.2)	111 (29.0)
60歳代	66 (17.2)	66 (17.2)	132 (34.5)
70歳以上	19 (5.0)	19 (5.0)	38 (9.9)
無記入	2 (0.5)	5 (1.3)	7 (1.8)
合 計	215 (56.1)	168 (43.9)	383 (100)

3. 大会に来たきっかけ (複数回答)

この大会を知って来たきっかけは、あらかじめ登録した人に送られてくる案内ハガキが200人 (48.2%) と約半数を占め、神楽ファンとしての固定客が多いことをうかがわせた。続いて、テレビ63人 (15.2%)、口コミ59人 (14.2%)、新聞38人 (9.2%)、ラジオ20人 (4.8%)、インターネット17人 (4.1%)、雑誌3人 (0.7%) であった。

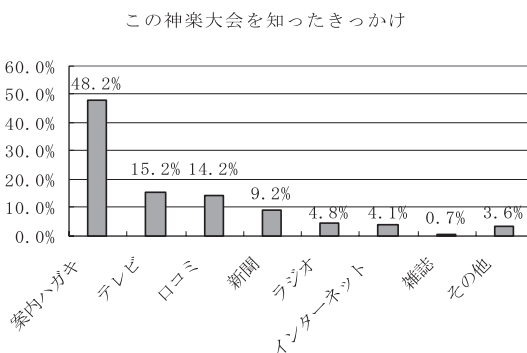


図 5-1 大会を知ったきっかけ

4. 一年間における神楽観賞回数 (あなたは年に何回くらい神楽を見に行けますか?)

回答が得られたもののうち、一年間に神楽を見に行く回数は、1～5回の212人 (60.1%)、6～10回の98人 (27.8%)、11～20回の19人 (5.3%)、21回以上の18人 (5.1%) の順が多かった。

表5-2 1年間の神楽観賞数 人 (%)

回数	回答者数	回数	回答者数
1～5回	212 (60.1)	5回	50 (14.1)
6～10回	98 (27.8)	4回	33 (9.3)
11～20回	19 (5.3)	3回	63 (17.8)
21回以上	18 (5.1)	2回	48 (13.5)
合計	353 (100)	1回	18 (5.1)

無記入 30名

5. 居住地・出身地

居住地別では、広島県内からの観客が356人(93%)であった。県外居住者は24人(6.3%)であった。県内居住者のうち広島市内に居住する者が244人(63.7%)で最も多かった。本調査研究地である芸北地域(安芸高田市1人(0.3%),山県郡11人(2.9%))居住者は13人(3.2%)と少なかった。

出身地別では、広島県出身者が285人(74.4%)で、県外出身者は79人(20.6%)だった。県内出身者のうち広島市内の出身者が90人(23.5%)と最も多かった。次に山県郡の58人(15.1%),島根県の44人(11.5%),安芸高田市36人(9.4%),東広島市および佐伯郡9名(2.3%),廿日市市および安芸郡7人(1.8%)の順であった(表5-3)。

表5-3 居住地×出身地 人 (%)

居住地	出身地										合計
	広島市	東広島市	廿日市市	安芸高田市	山県郡	佐伯郡	安芸郡	その他	島根県	無記入	
広島市	82(33.6)	4(1.6)	2(0.8)	29(11.9)	40(16.4)	7(2.9)	0(0.0)	43(17.6)	29(11.9)	8(3.3)	244(100)
東広島市	0(0.0)	4(28.6)	0(0.0)	2(14.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	6(42.9)	1(7.1)	1(7.1)	14(100)
廿日市市	1(8.3)	0(0.0)	5(41.7)	0(0.0)	1(8.3)	1(8.3)	0(0.0)	4(33.3)	0(0.0)	0(0.0)	12(100)
安芸高田市	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100)	0(0.0)	0(0.0)	1(100)
山県郡	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	9(81.8)	0(0.0)	0(0.0)	1(9.1)	1(9.1)	0(0.0)	11(100)
佐伯郡	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(25.0)	1(25.0)	1(25.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(25.0)	0(0.0)	4(100)
安芸郡	3(11.5)	0(0.0)	0(0.0)	3(11.5)	3(11.5)	0(0.0)	6(23.1)	8(30.8)	2(7.7)	1(3.8)	26(100)
その他	4(6.2)	1(1.5)	0(0.0)	1(1.5)	3(4.6)	0(0.0)	0(0.0)	47(72.3)	7(10.8)	2(3.1)	65(100)
島根県	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(100)	0(0.0)	3(100)
無記入	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(33.3)	0(0.0)	1(33.3)	0(0.0)	0(0.0)	1(33.3)	3(100)
合計	90(23.5)	9(2.3)	7(1.8)	36(9.4)	58(15.1)	9(2.3)	7(1.8)	110(28.7)	44(11.5)	13(3.4)	383(100)

6. 神楽を知ったきっかけ（神楽をお知りになった時期ときっかけを教えてください）
 きっかけ（複数回答可）

1. 子供の頃、みて育った → 実際に舞った経験（囃子も含む）が ある ・ ない
2. 家族・親族・知人が神楽を舞っているから 3. 家族・親族・知人にすすめられて
4. 競演大会やイベントで知って 5. ビデオやテレビを通じて
6. インターネットを通じて 7. その他

表 5-4 神楽を知ったきっかけ

きっかけ	人 (%)	時 期	人 (%)
子どもの頃見て育った	240 (50.5)	あ る	46 (19.2)
競演大会やイベントで知って	96 (20.2)	な い	142 (59.2)
家族・親族・知人が神楽を舞っている	59 (12.4)	無記入	52 (21.7)
家族・親族・友人にすすめられて	48 (10.1)	合 計	240 (100)
ビデオ・テレビを通じて	20 (4.2)	子供の頃にみて育ったと回答した240名のうち神楽を舞った経験があるかないか（囃子含む）	
祭り	7 (1.5)		
インターネットを通じて	4 (0.8)		
母の日のプレゼント	1 (0.2)		
合 計	475 (100)		

無記入29名

神楽を神楽をお知りになった時期ときっかけを教えてくださいという問いに対しては、子供の頃に見て育った人が50.5%（240/475人）で最も多く、そのうち、実際に神楽を舞った経験（囃子含む）人の割合は19.2%（46/240人）であった。以下、競演大会やイベントを通じて知ったが20.2%（96/475）、家族・親族・知人が神楽を舞っているが12.4%（59/475）、家族・親族・知人にすすめられてが10.1%（48/475）、ビデオ・テレビを通じてが4.2%（20/475）、祭りが1.5%（7/475）、インターネットを通じてが0.8%（4/475）、母の日のプレゼント0.2%（1/475）であった。

観客のおよそ半数が子どもの頃から神楽に親しみを持って育った世代であることが明らかになった。また、大会やイベントを通じて神楽を知った人が2割程度を占めていることから、大会やイベントが果たす宣伝の役割と効果が小さくないということも明らかになった。

V. 結 論

神楽大会やイベントなどにおいてかつて見られなかった広がりや盛況を見せる「広島神楽」だが、それを支える現場には問題・課題もあることが浮き彫りになった。

神楽団においては、一つに、氏神社の上演だけでなく、他地区、あるいは広島市内の劇場ホールなどにおける上演機会が増えても、そのニーズはアマチュアの領域を超えるものではなく、出演料も安く、団員移動にかかる最低限の必要経費にしかならないこと。二つに、団員は通常の練習（週1～4）、本番などにおいては家族や組織の上司、同僚に気を遣いながら活動していること。三つに、団員不足に悩むところも少なくないこと。四つに、氏子の減少などによって神楽団の活動拠点であるお宮の維持そのものが困難な地域もあること。五つに、相対的に若い人たちは見た目も派手な「新舞」や「スーパーカグラ」を好む傾向があり、伝統的な舞としての「旧舞」が廃れていく傾向にあることが明らかになった。

神楽ファンにおいては、年齢層の固定化と高年齢化という実態が明らかになった。2004年12月に行った神楽大会における観客アンケートによると、50歳以上の観客が74.7%を占めていた。また、あらかじめ登録されている人への案内ハガキがきっかけで大会に訪れた人が48.2%であった。同じように、2005年5月に広島市内のアステールプラザで行なわれた神楽大会（SUPER KAGURA 炎の舞）では50歳以上の観客が7割以上（74.2%）を占め、案内ハガキをきっかけに訪れた人は、過半数（51.6%）を超えていた（神楽大会実行委員会調べ）。

以上のように、神楽団そのものの維持と、神楽団を支えるファン層の高年齢化など、神楽の将来に対して楽観的になれない要因も少なくない。

芸北地方は県内で最も過疎の進んだ地域であり、高齢化率も30%を超えているという現実の中で、行政は神楽を地域活性化の大きな柱として位置づけ事業を進めているが、果たしてそれがどのくらいの効果を生み出すのかは、未知な部分が多いのが実状である。また最近では広島市内でも劇場ホールやホテル、大型小売店舗などでのイベントなど様々な形で神楽の興業機会が増えてきて、広島観光の目玉となりつつあることからして、将来広島市内において観光客用の神楽常設館を作ろうという具体的な動きが経済界にある。こうした現況の中で山間部の神楽の市場化が進むほど、神楽はますます地域と離れて都市における娯楽性の高い観光資源となっていく。

神楽が広島県だけにとどまらず、中国地方をも代表する観光資源となることを地域振興政策の柱と考えている行政の思惑もある。すでに、地域振興における神楽は芸北地域という狭い行政区分だけで考えられるものでなくなってきている。

現在、広島神楽団と島根神楽社中の交流が盛んに行われており、どのような大会にお

いても両県の神楽団・神楽社中の舞を見ることができる。また、両県の神楽は中国五県だけでなく関西地方や関東地方でも公演されている。関東や関西の人たちにとっては、「広島神楽」、「石見神楽」といった区別すら意味をなさない状況下にある。

2004年の調査（NPO 広島神楽芸術研究所）で分析されたように、神楽ファンが高年齢層であること、また彼らの多くは、かつての芸北人、石見人たちであることを考えると、果たして、彼らの二世、三世が神楽ファンとなりうる可能性があるのか。仮に、その可能性がなければ、やはり今日のいわゆる「広島神楽」は一種のブームにすぎなかった、ということも予測から否定できない。まだまだ「広島神楽」の調査研究には時間を必要とする。

いつの時代も人々のニーズ（経済や文化）は、行政区分に関係なく広域的な広がりをみせる。将来「広島神楽」や「石見神楽」が「中国地方の神楽」と総称され中国地方の大きなシンボルイメージを形成する日が来るかもしれない、という期待を多くの人が寄せていることは事実でもある。

参 考 文 献

- NPO 広島神楽芸術研究所, 2006, 『第 4 回マイクロソフト NPO 支援プログラム 神楽活動団体調査報告書』。
 石塚尊俊, 2001, 『神楽と祭りと芸能の山陰路』ワン・ライン。
 _____, 1980, 『里神楽の伝承者について』国学院大学出版。
 _____, 1979, 『西日本諸神楽の研究』慶友社。
 岩田勝編, 1990, 『中国地方神楽祭文集』三弥井書店。
 岩田 勝, 1983, 『神楽源流考』名著出版。
 財団法人地域伝統芸能活性化センター, 1999, 『国内モデル調査—広島県—』。
 佐々木順三, 2001, 『神楽』美土里町観光協会。
 新藤久人, 1973, 『広島神楽—神々を訪ねて—』広島文化出版。
 高崎義幸, 2006, 「いわゆる広島神楽と芸北地域の社会学的調査研究」『アプローチ』第12号, 広島修道大学大学院社会学研究会。
 高見乾司, 2001, 『お神楽』平凡社。
 千代田町役場, 1987, 『千代田町誌』広島県山県郡千代田町。
 日隈健一, 2010, 「いわゆるいまの「ひろしま神楽」の今日的位相 (2)—韓国共同体(ドウレ), 祝祭(クツ)の変容と重ねて—」『広島修大論集』51(1), pp. 95-118。
 _____, 2009, 「いわゆるいまの「ひろしま神楽」の今日的位相」『広島修大論集』50(1), pp. 71-96。
 広島県芸北地域事務所, 2002, 『芸北地域発展プラン』。
 本田安次, 1993, 『日本の伝統芸能 本田安次著作集 神楽 I』錦正社。
 真下三郎, 1981, 『広島県の神楽』第一法規出版。
 三村泰臣, 2004, 『広島神楽探訪』南々社。
 矢富巖夫, 2000, 『日本の美を舞う石見神楽』石見神楽高津社中。
 _____, 1985, 『石見神楽』山陰中央新報社。
 米田雄介, 2001, 『神楽の変容とその社会的基盤に関する研究』平成12年度県立大学重点研究事業研究成果報告書, 広島県立女子大学。

Summary

Sociological analysis of transmission and rise in “Hiroshima Kagura”

Yoshiyuki Takasaki

This paper is a Sociological analysis of transmission and rise in “Hiroshima Kagura”.

Currently, more than 1,000 “Kagura” has been transmission in Japan, but they are disappearing due to the lack of an inheritance and diversification of values.

“Hiroshima Kagura” transmitted to Shimane Prefecture and Hiroshima, has gained popularity while changing the shape to those of high drama.

A result of the investigation, A lack has been found in team staff and activity cost, activity location of Kagura team. And it was also found the aging of “Kagura audience”.

In now “Hiroshima Kagura” has become popular, but it is not the only bright outlook.